

子育て支援における幼稚園の役割

—預かり保育と未就園児支援に関する園長インタビューから—

掘越 紀香*・安藤 智子**・荒牧美佐子***・
丹羽さかの****・岩藤 裕美*****・無藤 隆*****

【要 旨】 本研究では、35 園の幼稚園園長に、子育て支援に関するインタビューを行い、1) 子育て支援における幼稚園の役割 2) 預かり保育と未就園児支援の実施状況、妨げと工夫、成果 について検討した。幼稚園の子育て支援では、「子育ての楽しさ」「保護者の学びや自立」「保育者と保護者の相互作用」「保護者同士や地域のネットワーク」「子どもの成長の保障」が目指されていた。幼稚園の役割は、地域の子どもや保護者に対して、幼稚園教育の大切さを伝え、子どもに相応しい遊び場を提供し、地域とのつながりを広げることであった。預かり保育と未就園児支援では、補助金助成や人材確保、場所確保の難しさ、保育者の忙しさが問題になっていた。成果として、預かり保育では、保護者と子どもが楽しみにしていること、異年齢交流のよさ、保育者が子どもの姿を一日通して理解できることなどが挙げられていた。未就園児支援では、保護者の友だちができること、保護者と子どもが幼稚園に慣れること、入園前に親子のかかわりが分かること、園児獲得につながるなどが挙げられていた。

【キーワード】 幼稚園 子育て支援 預かり保育 未就園児支援

1. 問題・目的

現在幼稚園では、「地域の幼児教育のセンター」としての子育て支援機能を活用して、「親と子の育ちの場」としての役割を果たすために、さまざまな子育て支援事業が展開されている。

平成 20 年6月2日受理

*ほりこし・のりか 大分大学教育福祉科学部

**あんどう・さとこ 山脇学園短期大学

***あらまき・みさこ 東京福祉大学

****にわ・さかの お茶の水女子大学大学院

*****いわふじ・ひろみ お茶の水女子大学大学院

*****むとう・たかし 白梅学園大学

なかでも預かり保育は、現行幼稚園教育要領に引き続き、2008（平成 20）年 3 月に告示された新幼稚園教育要領において「教育課程に係る教育時間の終了後等に希望する者を対象に行う教育活動」と明確に位置づけられ、幼稚園の主な子育て支援機能の 1 つである。

神田と山本（1999）は、幼稚園側の意識を中心に、預かり保育がどのように行われているかを実態調査した。子どもから離れて自分の時間を持つことによって、保護者のリフレッシュ効果を期待する園がある一方で、「情緒の安定が弱い子ほど親が預かり保育を希望する」「大切な親子のふれあいが補いきれない」などの理由から、預かり保育を必要ないとする園もあった。しかし、地域や家庭における子育て機能の低下や少子化対策から、子育て家庭への支援は急務となり、育児放棄を助長せず育児不安を軽減する支援を目指し、2006 年には 9,663 か所（全体の 70.6 %）の幼稚園で預かり保育は実施されている。

また、横浜市の預かり保育を調査した研究（園田・無藤，2001；無藤ら，2002）によれば、預かり保育が幼稚園の整った環境を使用し、保育者や子ども同士のやりとりで質の高い保育が行われており、保育者や保護者から見て子どもの発達に良い影響を与えている可能性が示唆された。預かり保育の利用理由としては、就労や緊急時、兄弟の行事、通院、介護、資格取得、リフレッシュのほか、子どもの希望やアットホームな雰囲気や異年齢体験をさせたいなどの理由が挙げられていた。

この他にも、幼稚園では未就園児支援や子育て相談、園庭解放などが行われている。「子育て支援」という場合、一般に働く親と子どものための就労支援と、就労以外の社会参加や子育てのリフレッシュが目的とされている地域の親子へ向けた地域子育て支援がある（杉山，2003）。どちらの支援も、身近な相談先が少なく育児不安を感じる人が多い親たちに向けて、友だちづくりや子育て相談・アドバイス、特技を生かした自己発揮もできる「居場所」が提供されていると言えるだろう。

また、2006（平成 18）年には「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が制定され、認定子ども園がスタートした。幼児教育・保育を一体的に提供し、地域における子育て支援を行う機能を備えた施設が、都道府県知事によって認定されている。親の就労に関係なく、地域の 0 歳から就学前の子ども全体を対象としているのである。

このような保育をめぐる新しい流れのなかで、子育て支援における幼稚園の役割や意義について検討し、幼稚園で実施されている子育て支援の実態を把握することは必要である。そのため、幼稚園の子育て支援の実態調査として、2004 年から 2006 年に、預かり保育、未就園児支援、子育て相談について（丹羽ら，2006；安藤・堀越，2006；立石ら，2006；荒牧ら，2006），3 回の質問紙調査を実施し検討してきた。

そこで、本研究では、2005 年に実施した 35 の幼稚園園長への面接調査から、1）子育て支援における幼稚園の役割 2）子育て支援（今回は預かり保育と未就園児支援）の実施状況、妨げと工夫、成果 を取り上げ、幼稚園での子育て支援の実態についてより具体的かつ詳細に検討したい。

2. 方 法

1）調査園：「幼稚園における子育て支援に関する調査」として、2004 年、2005 年に全国複

数地域の幼稚園へ質問紙を配布し回答された園のうち、園長の面接調査への協力を承諾された 35 園。園種は、国公立 11 園 (31.4 %)、私立 24 園 (68.6 %)。所在地は、東北 5 園 (14.3 %)、関東 18 園 (51.4 %)、東海 3 園 (8.6 %)、関西 3 園 (8.6 %)、九州 6 園 (17.1 %)。園の規模は、小規模園 (園児数 100 名未満) 11 園 (31.4 %)、中規模園 (100 名～300 名未満) 18 園 (51.4 %)、大規模園 (300 名以上) 6 園 (17.1 %) だった。

2) 調査時期：2005 年 8～10 月。

3) 調査方法：調査者が幼稚園へ訪問し、園長 (副園長、教頭) に半構造化面接を実施した。面接の様子は、園長の下承を得て MD レコーダーや IC レコーダーに録音し文字化した。

4) 調査項目：(1)～(5)について、質問した。なお、今回は、主に (1)、(2)、(5) の一部を検討した。

(1) 預かり保育 (2) 未就園児支援 (3) 子育て相談 について、以下の 3 点を尋ねた。

①始める際、どのような成果を期待したか。妨げやひっかかりはあったか。

②実際に実施して、始めに抱いていた期待や妨げは変化したか。どのような変化か。

③子どもや保護者、園、地域に対して、具体的にどのような成果があったか。

(4) 子育て支援への保護者からの要望

①保護者からの要望はどんな内容が多いか。

②保護者からの要望をどのように理解、評価し、対応したか。

③子育て支援へのスタッフからの要望はあるか。

(5) 子育て支援全般

①3つのプログラム以外に、どのような子育て支援があるか。

②それは、どのような視点から子育て支援と考えているか。

③子育て支援とは、どのようなものと考えているか。

3. 結果と考察

1) 子育て支援における幼稚園の役割

35 園の幼稚園園長へのインタビューから、各園の子育て支援の実施状況 (預かり保育、未就園児支援、子育て相談) をまとめたものが、表 1 と表 2 である。預かり保育の実施園は 29 園 (82.9 %) であり、実施していない園でも「園庭開放」や「お残り」は実施している園があった。また、未就園児支援のうち、園 (園庭・保育室) 開放の実施園は 31 園 (88.6 %) と多かったが、未就園児保育の実施園は 17 園 (48.6 %) だった。子育て相談は、個別相談として全 35 園 (100 %) で行われており、高い実施率であった。園外専門家 (臨床心理士、医師、保育カウンセラー、元学校関係者など) が相談に応じる体制にある園は 20 園 (57.1 %) だった。子育て支援全体でみると、国公立園に比べて私立園で多く、私立園が積極的に子育て支援事業を展開していることが示された。

(1) 子育て支援のきっかけや期待

子育て支援を実施するきっかけとしては、まず、保護者、特に母親の子育てへの不安やプレッシャーから解放し、ホッとする時間を持たせたい、リフレッシュさせたいという気持ちから始められていた。そして、幼稚園を子育ての楽しさや子どもとふれあうヒントを発見・実感で

表1 調査協力園の子育て支援実施状況(1)

	国公立 保育年数	預かり保育			未就園児支援			子育て相談			
		預かり	実施日	補助金	保育	園開放	補助金	個別	集団	専門家	補助金
1	公立2年 中規模園	○	月1	×	—	○	×	○	○	×	×
2	公立2年 小規模園	○	月2	×	○	月3 週1 月2	×	○	○	×	×
3	公立2年 小規模園	○	月2	×	○	○	○	○	○	○	×
4	公立3年 小規模園	×	— (園庭開放毎日)	—	○	○	×	○	○	×	×
5	公立2年 小規模園	○	週4	○	—	○	×	○	○	○	×
6	公立3年 小規模園	○	平日	○	○	○	×	○	○	○	×
7	公立3年 小規模園	×	— (園庭開放あり)	—	—	○	×	○	○	○	×
8	国立3年 中規模園	×	— (園庭開放あり)	—	—	○	×	○	○	×	×
9	私立3年 大規模園	○	平日・土日 長期休業中	○	—	○	×	○	○	○	○
10	私立3年 中規模園	○	平日 長期休業中	○	○	○	×	○	—	○	×
11	私立3年 中規模園	○	平日 長期休業中	○	—	○	×	○	○	○	×
12	私立3年 中規模園	○	平日 長期休業中	○	○	○	×	○	—	○	×
13	国立3年 中規模園	×	—	—	—	×	—	○	○	○	×
14	私立3年 小規模園	○	平日 長期休業中	×	—	○	×	○	○	×	×
15	私立3年 小規模園	○	平日・土日 長期休業中	○	—	×	—	○	—	×	×
16	公立2年 小規模園	×	—	—	—	○	×	○	○	○	○
17	私立3年 中規模園	○	平日 長期休業中	○	—	○	×	○	—	×	×
18	私立3年 中規模園	○	平日 長期休業中	○	○	○	○	○	—	○	×

註) ○:「実施」「補助金あり」 ×:「実施せず」「補助金なし」 —:「不明」「回答なし」

小規模園:園児数100名未満 中規模園:100名～300名未満 大規模園:300名以上

表2 調査協力園の子育て支援実施状況(2)

	国公立 保育年数	預かり保育			未就園児支援			子育て相談			
		預かり	実施日	補助金	保育	園開放	補助金	個別	集団	専門家	補助金
19	私立3年 大規模園	○	平日	○	—	○	×	○	—	×	×
			長期休業中			月1(未就と在園)					
20	私立3年 中規模園	○	平日・土日	○	○	○	○	○	—	×	○
			長期休業中		週2						
21	私立3年 小規模園	○	平日	○	○	○	○	○	—	○	×
			長期休業中		週1						
22	私立3年 大規模園	○	平日・土日	○	○	○	○	○	○	○	×
			長期休業中		週1						
23	私立3年 中規模園	○	平日・土日	○	○	○	○	○	—	×	×
			長期休業中		週1						
24	私立3年 小規模園	○	平日	○	○	○	×	○	○	○	×
			長期休業中		週1						
25	私立3年 中規模園	○	平日	○	○	○	×	○	○	○	×
					週2						
26	私立3年 中規模園	○	平日・土日	○	—	○	×	○	○	○	○
			長期休業中			長期休業中数回					
27	私立3年 中規模園	○	平日	○	—	○	×	○	—	×	×
			長期休業中			月1					
28	私立3年 大規模園	○	平日	○	○	○	×	○	○	×	×
			長期休業中		週1						
29	私立3年 中規模園	○	平日	○	○	○	○	○	○	×	○
			長期休業中		週1						
30	私立3年 大規模園	○	平日	○	—	○	○	○	—	○	○
			長期休業中			月2(未就と在園)					
31	私立3年 中規模園	○	平日	○	—	×	—	○	—	×	×
			長期休業中								
32	私立3年 大規模園	○	平日・土日	○	○	○	○	○	○	○	×
			長期休業中		週5						
33	私立3年 中規模園	×	—	—	—	×	—	○	—	○	×
			(お残り週4あり)								
34	私立3年 中規模園	○	平日	○	—	○	×	○	○	○	×
						月1					
35	公立3年 中規模園	○	平日	×	—	○	×	○	—	×	×
						月1					

註) ○:「実施」「補助金あり」 ×:「実施せず」「補助金なし」 —:「不明」「回答なし」

小規模園:園児数100名未満 中規模園:100名～300名未満 大規模園:300名以上

きる場、母親の力を発揮できる居場所にしたいと述べられていた。

預かり保育では、仕事を持つ保護者から、幼稚園教育を受けさせたいというニーズを寄せられ、女性の就労支援から始まった園や、文部科学省や自治体の意向から実施に踏み切った園があった。また、家族が病院へ行ったり、急病で看護したりして困っていた保護者がいたこと、家に帰っても遊ぶ友だちが少ないなど、家庭に帰っても行き場のない子どもの居場所となろうと考えたこともきっかけとなっていた。

未就園児支援では、少子化などによる園児数の減少から、園児獲得のために実施している園も多いが、地域の保護者に対して幼稚園を拠点として友だちを作って欲しい、保護者同士で不安を解消できるような交流の場を作りたいという願いから実施されていた。また、幼稚園に慣れてもらい親子で楽しく過ごすことで、入園時の子どもや母親の不安を減らして良い状態で迎えたい、幼稚園と保育所との違いや幼稚園教育の大切さ、子育ての知恵などを伝えたいと考えていた。一方、3歳児の入園当初身の自立ができておらず、その前のかかわりが必要と考えて実施した園もあった。

(2) 子育て支援とは

子育て支援についての考えを述べてもらったところ、「子育ての楽しさ」「保護者の学びや自立」「保育者と保護者の相互作用」「保護者同士や地域のネットワーク」「子どもの成長の保障」の5つに分けられた。

「子育ての楽しさ」としては、保護者が楽しく気持ちよく子育てする手助け、子どもを「かわいい」と思えるようにするための手助け、親としての喜びや親子の絆をはぐくむことなどがあった。

「保護者の学びや自立」には、保護者に自覚を促し目覚めさせるような支援や、子育ての肩代わりでなく保護者自身が自立できるようにするための手伝い、家庭教育や幼稚園教育の大切さをより理解してもらうこと、場所の提供・コーディネート・環境設定などの親子の育ちの場づくり、子どもと保護者のケア、保護者への就労支援などがあった。ある園では、幼稚園で子どもが体験すること（芋掘りや焼き芋づくりなど）を保護者もともに体験して喜び、家庭でも話題が継続するよう配慮したり、園だよりに子育てワンポイントを加えたりして、保護者の学びを促していた。

「保育者と保護者の相互作用」は、保護者と保育者がともに子どもについて双方向で考え合い育ち合うことや、園からの一方的なサービスでなく保護者と保育者が一緒に作り上げていくこと、園は押しつけでなく選択肢を用意して、保護者が子どもに合ったものを主体的に選ぶことなどだった。

「保護者同士や地域のネットワーク」は、保護者同士や地域のネットワークのなかでの助け合いや、子どもを取り巻く幼稚園と保護者と地域のなかでの幼稚園の体制などだった。保護者同士を仲良く活動させることが1番の子育て支援になるという園もあった。

「子どもの成長の保障」は、子ども同士がかかわる機会をもてるよう保護者が安心して子どもを出せるような支援や、子どもがよりよく成長すること、子どもの最善の利益を優先した支援などだった。

以上から、幼稚園としての教育や場を生かしながら、保護者には子どもにポジティブな感情を抱けるよう情緒的なメッセージを伝えるとともに、子どもだけでなく保護者の子育て力も育

てていくことを目指し、保育者自身も成長していく環境を地域のなかに作り上げていくことが、「子育て支援」と考えられていることがうかがわれる。

(3) 幼稚園の役割とは

地域の幼稚教育のセンターとしての役割を担うべき幼稚園として、特に公立園では、幼稚園のもつ教育機能を地域に提供していくことを強調していた。公立私立を問わず、幼稚園は地域の子どもの生活の何が大きかを伝えたり、幼児教育の大切さや保育内容を話したり、幼稚園が子どもにとってふさわしい遊び場であることを体験してもらったりなど、積極的に発信していく必要がある。実際多くの園が、地域の親子向けに、未就園児支援や園庭開放、子育て講演会などを積極的に実施し、ホームページやチラシ、自治体の広報などで広報していた。さらに、保護者の人間関係の広がり、体験の広がりを考え、色々な地域の人に顔を出してもらい、来園した大人も子どもも体験が広がっていくような、さらに開かれた幼稚園にすることが、地域の子育て支援を行うべき幼稚園の役割だと述べる園も見られた。

また、長時間子どもを預かることに本当は反対だが、世のなかには本当に困っている人がいるのに、公立が手を差し伸べられないのはとても苦しいという園や、人とものお金の体制がある程度整わなければ慎重にならざるをえないとする園もあり、保育者の心情と現実問題との葛藤や、行政からの補助金助成の問題もうかがわれた。一方で、ある公立園では、働く女性の就労支援を視野に入れたとき、幼児教育は1日4時間だが、幼稚園を4時間で切ったら、幼稚園は存続できるのかと危機感を強めていた。幼稚園の自助努力も必要だが、幼稚園として地域を活用しながら就労を支援していく方法（例えば、ファミリーサポートセンターの活用、地域の関連施設の情報伝達など）を提案し、知らせていくことも必要だろう。

私立園の場合、ほとんどの園で預かり保育を実施し、保護者の就労を支援しているが、保育所との違いを意識して、幼稚園としての枠のなかで子育てを支援する方法、保育内容をポイントにした支援を考えていきたいとする園や、認定子ども園のように幼稚園と保育所を一体化した方向で考えていこうとする園などがあつた。各園の方針に基づき、さまざまな方法で幼稚園の役割を探っているようすがうかがわれたが、幼稚園教育の大切さを強調する点では共通していた。

2) 子育て支援の実施状況、妨げと工夫、成果

(1) 預かり保育

<実施状況>

預かり保育の実施については、国公立園では「実施していない」、「月1～2回」が多く、私立幼稚園では「平日」、「平日と長期休暇中」、「平日と休日と長期休暇中」が多い傾向が見られた。また、表だつては実施していない園が、保護者の状況により個々に対応して、在園児や卒園児を預かっている場合も見られた。

国立園では、園の性格上実施されていなかった。しかし、ある園では、具体的には進んでいないが、「月1回程度（保護者に）自分の時間を持たせてあげたい。それが結局子どもにもよい影響を及ぼすのではないか」ということから、日にちを設定し、人数制限をして、4時頃まで預かることも考えていた。公立園は、私立園や近隣園との兼ね合いや取り決めから、実施が制限されている場合もあった。

なお、預かり保育ではないが、降園後に1時間程度の「園庭開放」を、保護者の見守りを前

提として日常的に実施している園も見られた。

スタッフは、園長や教頭、有資格のパート専任、当番の保育者、フリーの保育者、ボランティア（卒園児や在園児の母親、学生、地域の方）などさまざまであり、補助金や人材など各園の状況に応じて、人数も決められていた。

内容としては、主に家庭的な保育を目指している場合と、子どもの遊びの充実を目指している場合があった。家庭的な保育を目指すある園では、となりに家を作り、門から出て帰る家があるようにし、家庭と同じようにお風呂を付け、畳の部屋を用意したという。卒園児のお母さん先生が玄関で「お帰り」と迎え、制服から私服に着替えて、自分の家に近い雰囲気大切にしていた。

一方、子どもの遊びの充実を目指すある園では、家に帰って地域の友だちと遊ぶことができればいいが今は難しいため、その分幼稚園で友だちと遊ぶ場を作りたいと考えており、「子どもにとってのよりよい時間の1つ」と位置づけていた。さらに、ある園では、子どもたちの保育の充実、遊びの充実、特に5歳児にはもっと経験や活動させたいと考え、教育課程にも保育時間の延長を打ち出していた。

遊びや活動としては、ドッジボールや砂遊びやおもちゃづくり、通常保育とは別の遊びとして、サッカーゲームやゲーム板やレゴなどの家庭での遊びや、家庭でできないような遊び（編み物や刺繍、アイロンビーズなど）、そのほかにもおやつ（手作り、市販）や、図書館見学、お誕生パーティーなどのイベントなども行われていた。

＜妨げと工夫＞

預かり保育に限らず、子育て支援を実施する際に問題となるのは、環境面での妨げであった。まず、行政から、補助金の助成があるか否かによって、人件費、教材費などに影響する。特にスタッフの人数や、パート専任、非常勤兼任、ボランティアなどの適切な人材の確保を妨げとして挙げている園が多かった。保育料だけでは大赤字のため、自治体に要請して補助金が出ることになり、すれすれの線で何とかやっていたようになった園や、通常保育の保育者を時間延長して預かりスタッフにするつもりはなかったため、パート専任を確保したが、その資金や預かり料金の設定などに苦労している園もあった。

また、保育者の忙しさや時間のなさも妨げになっていた。管理職中心に預かり保育を実施している園では、園長の仕事や園内研修や職員会議などで時間を取るのが難しいなか、保育者の事務を減らすなどして、月2回ほど実施していた。また、非常勤の兼任が担当したり、常勤保育者がパート専任と組んで担当している園では、保育者が忙しくなったり、職員会議に出席できなくなったりするため、預かりスタッフを増やしたり、ローテーションを組んだりする必要があると考えていた。同時に、預かりスタッフと連携するためには、短時間で連絡する方法や預かり保育記録のやりとりなどを検討することが大切だろう。

場所の確保も妨げになっていた。空いている保育室があれば専用の部屋ができ、通常保育とは異なる家庭的な環境、遊具や教材を用意しやすく、子どもにとっても通常保育との区切りをつけやすい。しかし、実際には場所が足りないことを妨げとして挙げている園が多く、施設面での改善は難しいことがうかがわれた。まさに、「人ない」「物ない」「場所ない」「お金ない」の状況が妨げの大きな原因となっていた。

また、長時間預かることで子どもは色々な意味で我慢しなければならなくなり、しわ寄せが

行くことを心配していた園があった。しかし、預かりの仲間もできてかわり合い、かなり楽しそうにしているのを見て、安心したという。さらに、子どもが友だちと安心して遊べる場所、保護者が子どもを安心して預けられる場所の大事さを感じ、今はやらなければいけないことだと考えている園もあった。

一方、幼稚園でたっぷり遊んで帰るから預かり保育の必要はないのではないか、預ければ楽になるから保護者がどんどん預けて子育て支援にむしろ逆行するのではないかと保育者が反発した園があった。実際に始まったら保護者も「入れられるなら頼もう」とだんだん荷物を一時預けるような感じになってしまったという。そこで「本当に子育て支援になっているのか」と反省し、当日朝の締め切りを、前の月に申し込みと集金を済ませる方法に変更し、キャンセルは返金しないことにしたところ、安易に入れず必要なときを選んで申し込むように改善されたという。理由は問わないで預かるが、本来親子関係をよくするためのものであり、単なるサービスではないという強い思いが感じられた。

<成 果>

保護者については、1人で子育てして、いっぱいになっている保護者が、子どもを預けることでホッとできて喜んでいる姿や、自分の自由な時間がとれると楽しみにしている姿に、成果を感じていた。

子どもについては、仲良しの子どもたちが集まって、またひと遊びできるという預かり保育をととても楽しみにしており、「〇〇ちゃんと幼稚園で一緒に遊びたいから、お弁当作って」と子どもが志願して参加する場合もあること、特に年長児は本当に遊び込める時間が保障されて遊びの質がより充実したことを成果として挙げている。また、普段とは違う仲間と遊ぶことが一人っ子などにとって良い機会であり、通常保育とは異なるさまざまな教材に触れて遊ぶことで社会性を身に付けていることや、預かりスタッフに癒されるリラックスした良い時間と場所であることも成果としていた。さらに、預かり保育では縦割りの異年齢交流が見られ、年長児が年少児に絵本を読んであげたり、卒園した小学生が面倒を見てあげたりする姿に子どもの成長と感じていた。しかし、どうしてもおうちに帰りたいという子どもがいることも忘れてはならないだろうし、普段利用していない保護者と子どもにも預かり保育のようすを情報提供することは、初めて利用するときの不安を軽減するためにも必要だろう。

園としては、「幼稚園に入りたい」という働く保護者に対しての希望にそえたことが挙げられる。また、通常保育の担任と預かりスタッフが連携し、子どもが幼稚園で過ごす1日（保育時間と預かり保育時間）をトータルで見ることで、通常保育の時間には見られない子どもの姿が、預かり保育で見られることが分かって幼児理解に役に立つこと、それを保護者にもフィードバックすることで、お互い子どもの新しい一面を発見・共有でき、保護者との信頼関係が強まることで、成果として挙げられていた。

（2）未就園児支援

<実施状況>

未就園児支援の実施状況は、園庭開放・施設開放を含めて、国公立園でも私立園でも広く実施されている傾向があった。年数回から週5日まで、長期休暇中も園の状況に応じて実施されていた。未就園児用の部屋がある場合、その部屋をいつでも利用できるようにしている園もあった。

スタッフとしては、園長や教頭、非常勤、助手、パート専任、在園児や卒園児の保護者や学生などのボランティア、地域の児童民生委員などであり、幼稚園が場所を提供し保護者主体で進めている場合もあった。

内容としては、0～3歳対象の園庭や保育室の開放や、3歳児対象あるいは2歳児対象の未就園児クラスなどが実施されており、園庭やプール、ホール、専用の部屋などが使われていた。園庭開放だけでは遊びに満足できない3歳児のために、未就園児クラスが設定された園もあった。

基本的に親子参加だが、3歳児対象の未就園児クラスには、1時間ほど保護者の「お出かけタイム」を設け、保護者の外出を可能にする園も見られた。また、3歳児対象の未就園児クラスを実施することは、2年保育の園では園児獲得へつながる傾向があり、3年保育の園では、年少児の定員が少なく入れなかった保護者や年中児から入園させたい保護者が抱く、1年遅れることへの不安に対応していた。

遊びや活動としては、未就園児対象クラスでは、製作遊びや楽器遊び、運動遊び、手遊びなどの親子遊びが行われているが、ウェルカムパーティやミニ運動会などのイベントや在園児との交流が行われている園、子どもが遊んでいるそばで専門家による子育て講演を行う園、場所と時間を提供して活動自体は保護者主体でやっている園などがあった。

<妨げと工夫>

預かり保育と同様、環境面での妨げが大きかった。通常未就園児支援の利用料は無料か廉価なため、行政からの補助金によって人件費が左右され、スタッフの人数、パート専任やボランティアなどの人材確保、通常保育の保育者の負担などをやりくりしている園が多かった。ボランティアの場合は、保護者の安心のために有資格者を確保して実施している園も見られた。

また、場所の確保も妨げになっていた。未就園児専用の部屋を確保できないために、通常保育との兼ね合いで実施日を増やすことができない園が多かった。実施するときも、在園児がホールを使わない日や、在園児が園庭やホールを使用する時間帯を避けるなどの工夫をしていた。その際、在園児が大切なのはもちろんだが、未就園児も大事にしていくことを確認した園もあった。

保育者の忙しさ、時間のなさも妨げとして挙げられていた。保育者の負担が増えないように、在園児が午前中で降園したあと実施していたのを、在園児のなかに自然と入ってもらう形に変えるなどの工夫が見られた。

危機管理の面では、けがや事故がおきたときへの不安もあったが、保険に加入することで対処していた。知らない人が出入りすることへの心配に対して登録制にする園がある一方で、地域の親子が自由に出入りできることが重要と考える園もあった。

また、地域への還元という視点から、とにかく地域の親子を外へ連れ出したいと思って未就園児支援を実施しているが、引っ込んでいる親子にはなかなか届かない難しさを挙げている園もあった。ホームページや自治体の広報、チラシ、園だより、在園児の保護者に知り合いへのチラシ配布を依頼など、多様な手段を工夫する必要があるだろう。

<成果>

保護者にとっては、いつでも来てもいい場所があるのは安心感につながることや、親子の触れ合いによって子どもとの共通体験ができること、保護者の友だち作りの場を提供することで

保護者同士が友だちになり、病気や発達の心配事があっても保護者同士のおしゃべりで解決できること、保護者が子どもと離れる練習になり、入園時も安心できることが成果として挙げられた。また、保育者のかかわりをみて、子どもの叱り方や待ち方、ことばづかいなど望ましいかかわり方を学んだり、自分の子育てを見直したりする姿や、子どもができる動きを知って発達を理解する姿も見られた。ときには、他の子どもと過ごすことで、軽度の発達の遅れに保護者が気づくことや、子どもを遊ばせながら保護者の相談に保育者がのることで安心することにも成果を感じていた。

子どもにとっては、幼稚園の雰囲気になれることができ、入園時には遊びにも集団にも慣れていて混乱が少ないことや、家庭ではできないような経験ができたり、保育者から発達を促すようなかかわりを受けたり、おむつもとれたりすること、幼児にふさわしい遊び場で遊ぶことで表情が生き生きすることなどが、成果として挙げられていた。また、在園児が地域の小さい子どもと交流できることも、大事な成果だった。

園にとっては、初めは園外の子どもの入ってきて保育者も戸惑ったが、在園児にとって小さい子との交流がメリットになる経験をして、受け入れられるようになったこと、未就園児の親のニーズや現状、親子のかかわりが分かること、入園児の確保につながり、保育者も入園した利用児を受け入れるときの段差がなくなったことなどの成果が挙げられていた。また、未就園児の保護者から地域の情報をもらい、それをきっかけに児童館などへ働きかけたり、やりとりしたりすることができたという園もあった。

4. まとめ

今回幼稚園での子育て支援についてインタビューすることによって、預かり保育や未就園児支援の実態を把握すると同時に、保育所や認定子ども園などの保育施設のなかでの、幼稚園の役割について考えてきた。幼稚園での子育て支援としては、特に地域と連携し、地域の子どもと保護者を、地域の行政・施設・人材とともに支えていく点、幼稚園教育の意義をしっかりと保護者や地域へ伝えていく点が強調されていた。一方で、地域のニーズや園長の方針によって、あるいは国公立や私立によって、子育て支援への考え方に違いがあった。各園により事情は異なるにせよ、幼稚園教育の独自性や重要性を強調しつつ、地域の保護者や行政へ積極的にアピールしていくことが、補助金の助成や増額などにもつながっていくことになるだろう。関連して、環境面での妨げの改善は難しいものもあるが、幼稚園同士や地域の関連施設との連携から解決策が生まれた例も見られたように、常に工夫し改善を試みる姿勢が大切である。

最後に、今回触れることのできなかった子育て相談について簡単に述べておきたい。特に相談日を設けなくても、普段から積極的に立ち話をして、お迎えがあればそのとき必ず話すよう心がけていた園が多く、またその機会を大事に考えていた。個別相談では随時園長や担任が対応したり、保育カウンセラーや臨床心理士などの専門家が決まった日に対応したりしていた。園外専門家との個別相談では、第三者だからこそ園に言いにくいことを相談できる良さや、発達上の問題がある子どもに対して早く手が打てることなどが挙げられていた。グループ相談としては、園長やときに専門家が同席して、偏食などのテーマを決めて、自由におしゃべりしたり、毎月のお誕生会のあとにその保護者が集まって和やかな雰囲気でも子どもの成長を語り

合ったりする場が設けられていた。ただ、どの園でも来てほしいと願う保護者ほど関心が薄く、相談に来ないことを難しさとして挙げていた。

幼稚園の子育て支援について、ある園長は、幼稚園も保護者と子どもも「それぞれの状況が違うから、一律に規則を決めてというよりは、小回りの利くものにしていきたい」と述べている。それぞれのニーズに応じて支える場を用意し、自立していくための援助や学びの機会をそれぞれの幼稚園らしい工夫をして提供する。例えば、預かり保育において、家庭的な保育も重要であるが、遊びの充実を目指して、教育課程に組み込んだ園などは特徴的と言えるだろう。保育所における子育て支援に比べれば、制約があるのも事実である。しかし、有資格者の採用や、担当者数の充足、保育環境の整備、保育内容や保育記録の検討、専門家との連携など、保育の質を高めるよう努力し、自らも保護者の相談への対応や未就園児対象の保育にかかわる研修を受けたりするなど、よりよい幼稚園教育を実践していくことは、子育て支援において最も重要であることにはかわりはないだろう。

引用文献

- 安藤智子・堀越紀香 2006 幼稚園における「就学前の親子支援」に関する調査：実施状況と利用者の満足度 日本保育学会第 59 回大会発表論文集（浅井学園大学），750-751.
- 荒牧美佐子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・立石陽子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆 2006 幼稚園における子育て支援の利用状況（第 2 報）子ども発達教育研究センター紀要，3，9-16.
- 神田直子・山本理絵 1999 幼稚園における「預かり保育」・子育て支援に関する研究（その 3）：子育て支援の実施状況，幼稚園側の意識を中心に 愛知県立大学児童教育学科論集，33，43-55.
- 丹羽さかの・安藤智子・岩藤裕美・立石陽子・荒牧美佐子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆 2006 幼稚園における子育て支援の実態調査(2)（2005 年調査） お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，3，17-29.
- 無藤隆・園田菜摘・砂上史子・堀越紀香 2002 幼稚園の「預かり保育」を考える 発達，90，66-89.
- 園田菜摘・無藤隆 2001 幼稚園「預かり保育」に関する研究：保育の質と子どもの様子 乳幼児教育学研究，10，33-40.
- 杉山千佳 2003 働く母親のための子育て支援 現代のエスプリ，429，131-139.
- 立石陽子・岩藤裕美・砂上史子 2006 幼稚園における「子育て相談」に関する調査(1)：子育て相談の実施状況と園長の意識 日本保育学会第 59 回大会発表論文集（浅井学園大学），222-223.

The Role of Kindergarten in Child-Rearing Support

— With Special Reference to the Interview with Directors about Educational Activities Provided during Extra Hours and Childcare Services for Under-3-year-old Children and their Parents in Preschool —

HORIKOSHI, N., ANDO, S., ARAMAKI, M.,

NIWA, S., IWAFUJI, H., & MUTO, T.

Abstract

The purpose of this study is to examine the role of kindergarten in child-rearing support, and to investigate the actual conditions of educational activities provided during extra curricular hours and childcare services for under-3-year-old children and their parents. We interviewed 35 kindergarten's directors about their child-rearing supports in preschool. Child-nurturing supports in preschools were aimed to achieve "Happiness of bringing up children", "Parents' learning and independence", "Interactions of parents and teachers", "Networks in parents and communities", and "Security of children's growth". The roles of kindergartens were to teach the importance of kindergarten's education to parents in the communities, to offer the appropriate playground for children, and to extend the connection with people in the area.

They have many problems such as grant money, talents, facilities, and teacher's hard work in child-rearing support. Even so, the advantages of those educational activities provided during extra hours are that children and their parents are looking forward to the activities, that children take care of younger children, and that teachers can understand children's total lives. And the advantages of childcare services for under-3-year-old children are that their parents can make friends each other, that children and their parents get used to the lives in preschool, and that children who participated in the under-3-year-old class enter the kindergarten.

【Key words】 Kindergarten, Child-rearing support, Educational activities provided during extra curricular hours in preschool, Childcare services for under-3-year-old children and their parents.